城だより

第６６９号

日本古城友の会・会報　　令和６年（2024）９月８日発行

山城 静原城を訪ねる（10 月・第 732 回例会）

日　　時：令和 6 年 10 月 6 日(第一日曜日）現地集合　雨天決行（行程変更あり）

集　　合：叡山電鉄出町柳駅 改札口前 9:15 集合　時間厳守　鞍馬駅行 9:30 発に乗車

行　　程：叡山電鉄鞍馬駅行 9:30 発⇒貴船口駅 9:58 着(乗換)京都バス貴船口バス停 10:14 発⇒静原バス停 10:24 着⇒静原神社（受付）⇒ 北曲輪群主郭（昼食）⇒北曲輪群探訪⇒大堀切⇒南曲輪群主郭他各曲輪探訪⇒下山⇒静原神社 15 時頃着

※静原バス停では 15:54 発までバスがないため、1 時間程度バスを待つ予定。

アクセス：往路 京阪淀屋橋駅 8:00 発（特急出町柳行）⇒ 京橋駅 8:08 発⇒ 出町柳駅 8:56 着

復路 静原バス停 15:54 発⇒市原駅前 16:10 着（乗換）叡山電鉄市原駅 16:28 発⇒出町柳駅 16:50 着（乗換）京阪電鉄出町柳駅 17:12 発（特急淀屋橋駅行）⇒淀屋橋駅 18:07 着

※静原バス停発の京都バスは京都市営地下鉄の「国際会館駅前」まで行きます。

担当幹事：小川 實・下岡 力

持ち物：弁当（事前に準備してください。）・飲物・敷物・帽子・ハイキング靴・ステッキ・タオル・雨具を持参してください。マスク着用は各自の判断でお願いします。

参加費：正会員・賛助会員 800 円、通信会員・当日参加者 1,000 円

（資料代・保険代・記念写真代・下見費用として）

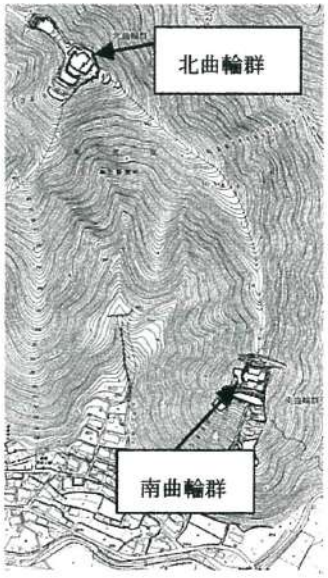
問合せ：下岡　力（090-6735-9843）

（開催は新型コロナ感染状況によります。必ずホームページを確認の上ご参加ください。）

【今回の見どころ】

静原城は静原集落の北背後の城谷山(じょうだにやま)(標高 474m)頂上付近の北曲輪群と、東南側に延びる尾根の下方先端部の南曲輪群からなる。西方の鞍馬街道と東方の敦賀街道を東西で結ぶ軍事的要所に位置していた。城主は、左京区岩倉の小倉山城の山本氏が文明年間(1469～86）または明応年間(1492～1501)に支城として築いたともいわれる。文献的には、『兼右卿記』に弘治 3 年(1557)三好長慶が山城五十余郷に夫役を課して築城し、山本氏が守備を担っていたと記され、『信長公記』によると天正元年(1573)10 月 8 日、明智光秀軍の攻撃で落城している。

北曲輪群の主郭周辺には階段や縁石などの石材が残る。周囲に曲輪を巡らせ、三方に延びる尾根上にも幾段かの曲輪があり、北西に続く尾根の堀切には土塁を設ける厳重な防御構造。南曲輪群は尾根先端部斜面を



（静原城位置図 京都府中世城館調査報告書から）

（7）真田昌幸・信繁（幸村）の妻女

真田昌幸・信繁の妻らも「人質」として大坂城に入ることを求められた。信繁の室は大谷吉継の娘（竹林院）であるが、吉継の娘であってもあくまで真田家の人間としての扱いだったのである。もっとも、長男の信幸の妻は家康重臣本多忠勝の娘であり、家康支持の信幸が領知する上野国沼田城に下向していたらしくい大坂城には入っていない。

大坂城に入った昌幸・信繁の妻らは大谷吉継の保護のもとにおかれ、吉継の大坂屋敷に居た。関ヶ原の戦い後、信繁の妻は昌幸・信繁と共に流刑地九度山に移り、長男大助らを生むこととなる。昌幸の妻（山手殿）は信之に引き取られ、信州上田に留まり、その後、出家して寒松院と号している。

（8）大谷吉継の妻女ら

母は「東（殿）」と呼ばれ豊臣秀吉室「高台院」に仕えた侍女であった。関ヶ原の戦いで敗戦し、吉継が自刃した後は高台院のもとを去ったと推定されるが、妻に関しては未詳でほとんど情報が無い。

妹の「コヤ」は、本願寺宗主「顕如」の弟「顕遵」が門主である興正寺の坊官の下間頼亮の妻であった。興正寺端坊の明勝のもとに関ヶ原の戦場から逃亡した安国寺恵瓊が匿われていた。「コヤ」自身が吉継の妹であること、加えて「コヤ」周辺にも追及に及んだ可能性は高い。しかし、「コヤ」はその後も生存している。

娘（竹林院）は前段７の通りである。大谷吉継の場合、関ヶ原の結果を受けてその家族の命も奪われるという結果は無かったのである。

吉継の妻女ばかりではなく、宇喜多秀家の妻（豪、前田利家の娘で豊臣秀吉の養女）をはじめ、それぞれ事情は異なるものの島津義弘・小西行長らの妻らもまた生き残り、徳川政権の草創期を生きている。

講師の外岡教授はその著書「関ヶ原を読む」で、「彼女らの人生は関ヶ原の戦いを機に大きく変わったはずである。徳川政権が樹立され、その基盤が整えられていく中で、関ヶ原の戦いの勝者たちの人生は女も男もそれぞれ似通ったものになったのに対し、敗者の人生は女も男もそれぞれ色合いの異なるものになっていったのではないだろうか」と記しておられる。

私は、時代背景がそうさせたのであろうが、戦国期の女性は女としてできる限り戦い、後世の女たちより積極的に動き、明るく人生を生きた様に思えてならない。

（完）

日本古城友の会

会　長　　中西　徹

事務局　　事務局長　平川　大輔

HP アドレス https://www.kojyo-tomonokai.com/

編集・発行　編集部長　下岡　力